

古代日本人は金星に何を見たか スサノヲ金星説の検証

高橋 徹（倫理研究所専門研究員）

アステルよ、汝は以前、明けの明星として生きとし生けるものに光を投げ、
今はまた、宵の明星として死に臨み、死者たちの間で光輝いている（プラトン⁽¹⁾）

はじめに

筆者は2008年頃から「影と倫理」と題した研究をはじめ、その成果の一部を本『倫理研究所紀要』（第18、19号）に発表してきた。研究の一環として、あるとき「日本神話における影」の働きを探ろうと、『古事記』上巻と、『日本書紀』の該当箇所を相互に対照させながら、何度か読んだ。特に『記紀』の中にある天の安河の「うけひ（い）」の場面が目をついた。「うけひ」（「宇気比」あるいは「誓約、祈請」とも書く）とは、神意を伺うための呪術的な行為のことで、この場合、アマテラスとスサノヲ⁽²⁾の姉弟神がそれぞれ邪心のないことを示そうと、互いの持ち物（装身具）を交換して三神と五神を生むことである。そして、この場面を読むことで、脈絡なくふと思いついたことがある。スサノヲは、墮天使ルシファー（ルシフェル）とよく似ている ということである。

ルシファーとは、ラテン語で「光をもたらす者」の意で（Luci=光、fer=運ぶ、担う）明けの明星（暁に見える金星）と同一視される天使である。『広辞苑』（第六版、以下同）には、神に反逆して天から墮した最高位の天使。墮天使たちの頭領としてのサタン。とある。⁽³⁾

筆者は、旧約聖書をはじめとするルシファーにまつわる神話体系と、『記紀』におけるスサノヲの描写を相互に比較してみた。すると、非常に似通ったイメージがたくさんあった。⁽⁴⁾

相互比較作業から、ルシファーと同様に「スサノヲも太陽系の惑星の金星を指している、もしくは金星に深いつながりがある」と直観した。筆者は、金星の天文周期的な側面については長年にわたって研究してきたので、今までこのことに気づけなかったのが不思議なくらいだった。

この気づき、あるいは発見は、とても興奮に満ちたプロセスだった。「スサノヲが金星である」としたら、これは画期的な発見ではないかと思ったのである。

ところが、この興奮は束の間で長くは続かなかった。よく調べてみると、民族学や人類学の分野で著名な大林太良氏^{たりのう}（1929～2001）によって、すでに1995年に「スサノヲ金星説」が発表されていたからである。筆者の発見は、無知と浅学によるものだったのだ。また、多くの人がスサノヲとルシファーの類似性に言及していることも、あとから知った。

この事実を知り、少しがっかりした。とはいうものの（筆者の場合、こういうことはよくあるので）それにはめげずに、むしろ大学者である大林太良氏のお墨付きが得られたと思うことにして、大林氏の「スサノヲ金星説」を精読した。ところが、この大林氏の小論（氏はそれを「研究の中間報告」と呼んでいた）は、その後の進展を見ることがなかったようだ。というのは、大林氏は「人類の精神史」を描くために星や虹を研究するという壮大な意図を持っておられたが、2001年4月12日、志半ばで肝硬変で亡くなられたからである。⁽⁵⁾

現時点で、大林氏の志が若い研究者たちに引き継がれているのかどうかは不明だ。筆者はただ、当初の目的（「影

と倫理」の研究)に沿って、この説の検証に取り組むだけである。本稿では、前半で大林氏の「スサノヲ金星説」を概説し、後半で筆者の研究成果の一部を取り上げたい(なお、ルシファーについては紙幅の関係で割愛する)。